

みなと舎物語

初代理事長 瀧川郁子さんを偲んで

追悼号

<https://www.minato-yuu.or.jp>

TAMAGOMUSHI

たまごむし

VOL.07 2021 DEC



瀧川さんを偲んで

充さんと、ご家族との日々…



ご自宅で家族団楽のひとつ。家族と過ごす郁子さんのおだやかな微笑みがありました。



これからも…
瀧川さんの想いを感じて



1993年から1998年までに発行された新聞「こどものへや」の第1号から59号までを法人のWEBサイトで公開しています。ゆう設立までの当時の想いや葛藤をじっくりとお読みいただけます。

充さんが暮らすケアホームはなえみでのコンサートをご家族で満喫。演奏の余韻に3人で浸っています。

発行：社会福祉法人 みなと舎・ゆう家族の会

〒240-0104 神奈川県横須賀市芦名2-8-17

TEL:046-855-3911 FAX:046-855-3912



当冊子の発行にあたって、瀧川さんの想いを引き継いだゆう家族の会の皆様にご協力いただきました。



次の十年にむけて

社会福祉法人みなと舎も昨年の九月で十年目に入りました。時の流れの速さを感じています。バブルがはじけ失われた十年とされている時期でしたが、通所施設ゆう、ヘルパー事業、ケアホーム、ショートステイと事業を積み重ねてきました。障害の重い方達の地域生活が着実に充実していく手応えを感じています。

昨年障害者自立支援法が施行されました。その急激な変化と、法の理念と現実のギャップの大きさが、利用者にも事業所にも大きな不安をもたらしています。不備な点は見直され改善されていくことを期待しているのですが…。同じような事業を行なっているあるお母様と「次の夢を語れない時代になるのかしら」と話し合ったこともあります。

格差社会、勝ち組負け組など、障害を持つ方たちにはつらい言葉が時代を表すキーワードとして使われています。ゆうに通うメンバーの母親たちも、親の介護、自分自身の健康など加齢による問題を抱えています。つい気持ちは暗い方向へ流れがちになってしまいます。

しかし、私達の前には“生きていることそれが人生の基本であり、尊いこと”と全身で示してくれる子どもたちがいます。「不安にとらわれていてはだめ」と教えてくれています。その笑顔に比べられるように、できるだけのことをしていかなければと、新しい年を迎えてあらためて思っています。私達親のパワーは「障害のあるお子さんを育てて苦労されているのに、皆さん明るいんですね」と言っていたいでいる明るさです。この持ち味を生かし、力を合わせて歩んでいきたいと思っています。

広い視点で社会や政治をみる力と、今必要としていることを実行していく力を付けていくように、学び、努力していかななくてはと思います。次の十年を障害の重い方たちの失われた十年にしないためにも。

これからも皆様のご指導、ご協力をいただきながら歩んでいきたいと思っています。

本年もよろしく願いいたします。



ゆう開所式でスピーチをする瀧川理事長。

これまでに紡いだ言葉

瀧川さんの思い

広報誌に掲載した
節目のメッセージを寄せました。



広報発行にあたり

重い障害を持った子どもが、高校卒業後に通う場所がありませんでした。在宅になり、学校に通うことで身についた良い習慣や社会性、そして、友だちを失うことは考えられませんでした。地域社会の中で生活させたいと、母親達で作業所を作りました。しかし、作業所に限界を感じる様になり、子どもたちが幼い頃から欲しいと思っていた通所施設の建設に取り組みましたが、「子どもたちのために絶対、建てたい」という気持ちだけの出発でしたが、飯野施設長はじめ多くの方々のお力添えで、長い間みんなの願いが形になりました。夢のようです。これからは、ゆうの活動が充実したものになるように、法人として努力してまいります。みなさまのご理解とご支援をよろしく願いいたします。



ゆう設立5年前 ～追悼～

充が、産声を上げずに誕生した時から、私達夫婦の長い取り組みが始まりました。



武山養護学校を卒業した18歳の若者達5人は、新たなる交流の場を求めて、長沢駅近くの一軒家を借りて「こどものへや」に5年余り集いました。発刊された新聞第1号に寄せた当時の国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部室長の松田直先生のトップ記事の中から一部抜粋して紹介させていただきます。

「・・・所員と保護者の加齢に伴う様々な困難、今の建物の物理的制約、経済的基盤の弱さなどを客観的に考えますと、「こどものへや」を第一歩として踏み固めながらも、次の一歩を目指して検討を進める必要がある。いろいろな社会の壁に出会うことが十分予想されますが、次の一歩をどの方向に踏み出すべきか、他の地域の先進的な例も参考にしながら考えたいと思っています。1993年5月1日」

この指導を受けて当時の所長であった妻が一面に、「・・・重度の障害を持つ若者は、まだまだ知られていないのだとの思いもあります。生きることのすばらしさを語りかけている若者達の存在を、知っていただくこともこどものへやの仕事の一つだと思っています。街へ出かけて人々とふれ合うこと、こんな簡単なことから理解の一歩は始まると信じています・・・」

1993年5月8日に発行された第1号から、59号迄の5年間の記事の中に、やがて設立される「みなと舎ゆう」への苦難の取り組みが載せられています。土地探しや、夜の町内会に出席して設立意義を訴えたり、地価が下がると反対されたこともありました。

今、飯野理事長のもと、ゆうは更に発展し、「ライフゆう」の併設も果たしました。

更なる両施設の未来を、郁子は静かに・・・。

瀧川恒明

Contents

1
瀧川さんの
思い

P02

4
思い出
アルバム

P24

3
みんなの
メッセージ

P06

5
瀧川さんを
偲んで

P28

2
ご主人
より

P05

先人そのものと言える
人生を送られた瀧川郁子さんは、
2021年8月19日に亡くなられました。
みなさまから寄せられた想いと
数々の思い出をこの冊子にまとめました。



手を取り合って

◆ 瀧川さんから学んだこと

瀧川さんの計報に接し、今また、瀧川さんが横須賀の障害のある子どもたちにもたらしてくださったもの大きさを感じています。それは、「ゆう」という形あるものはもちろんのこと、「ゆう」設立に至るまでの、精神の大きさと強靭さ、といったようなものです。

人生の転機が多くは、ある人のある言葉によってもたらされます。私にとっては、びわこ学園の創始者として有名な糸賀一雄先生の「自覚者が責任者である」という言葉がそれでした。この言葉は、自分が課題だと感じたことは、自分で解決に向けた努力をするしか



ないのだ、という覚悟が必要であることを伝えていきます。何かを成し遂げる人とは、自分で設定した目標の達成に人生を捧げる人、と同義であるかもしれません。

瀧川さんの人生は、まさにこの言葉に集約されていると感じています。私が武山養護学校に赴任したのは平成三年、今からちょうど三十年前でした。そこに瀧川充さんをはじめ、愛すべき個性に溢れた生徒たちがいました。そしてこの人たちの保護者の皆さんはとてもエネルギーシユな方たちでしたが、とりわけ瀧川さんは、穏やかな話し方の中に強い芯を感じさせる方でした。

桜が丘から長沢へ移動した「こどもへのへや」の時代、そして芦名から湘南国際村へと拡大した「ゆう」の時代。この大きなうねりは間違いな

く、強い意志で多くの人たちの善意を集め、常に目的を指し示しながら人々の協力を引き出してきた瀧川さんの力によるものです。この力は、自覚者である瀧川さんの責任者としての行動が生み出したものであったと思います。

私は瀧川さんから、人としての生き方を学びました。そして、永遠の師として、私の精神に生き続けていきます。「ゆう」に関係する多くの人たちも、きっと同じ思いでいらっしやると思います。どうぞいつまでも遠くから「ゆう」の取り組みを見守り、応援してください。瀧川さん、ありがとうございました。



伊藤 大郎
元武山養護学校教諭
現みなと舎評議員

◆ 瀧川さんを偲んで

私が初めて瀧川さんとお会いしたのは平成二年四月、教員になって最初の入学式の日でした。新入生の子息・充さんと関わる事が多く、瀧川さんにも大変お世話になりました。まだ何もわからない私に、とても丁寧なわかりやすく、そして時々冗談を交えて、たくさんのことを教えていただきました。

二年目から進路の担当となった私は、地域福祉の現状が少しずつ理解できるようになりました。そんな中で、地域作業所「コミュニケーションルーム」の設立に向けて大変なご努力をされている瀧川さんには、「先生もすっかりして！」という背中をバシシと叩かれていた思い出でした。お辛いこともたくさんあったと思いますが、いつも落ち着いて、しっかり

前を向いていらした姿を、今でも覚えていています。

その後も瀧川さんは、進路担当を続ける私に、たくさんの「言葉」を贈ってくださいました。「障害児の親はどうして学資保険に入らないのかしら？」という言葉には、健常の子どもと同じように育てたいという願いや、将来に向けてしっかり準備するという覚悟が詰まっています。そういう保護者の思いに対して自分何ができるのか深く考えさせられました。また、「先生は出口（進路）の仕事をしているのに、入口は見なくていいの？」という言葉は、まさに今の私を取り組んでいる仕事に繋がっています。点ではなく線、線よりも面で物事を考えるという、今の私の考え方を育ててくれた、大切な言葉です。



ゆう開所式で
瀧川充さん、恒明さんと。



村上 知之
元武山養護学校教諭
現鶴見養護学校教諭

◆ 瀧川郁子さんの「思い」を思う

今から二十八年前の一九九三年五月八日に、「コミュニケーションルームこどものへや」の開所式が開かれました。この時の動画を見直してみますと、参加されていた方々のお顔や身のこなしは、言うまでもなく、若い!!の一言に尽きます。もちろん、今は天国から見守っておられる保護者、ご子息、専門家等の方々も映っています。また、「ゆう」と「ライフゆう」で生活されているメンバーさんの二十八年前の姿も映っており、人間の底力の「源」を実感できました。

私は、当時、国立特殊教育総合研究所に勤務していましたが、瀧川さんのご子息である充さんの幼少期には、私と同じ重複障害教育研究部の川住隆一さん(故人)が教育相談を担当しておられ、私は廊下ですれ違

う程度でした。

充さんが高等部に進まれると、保護者間のチームワークが一層強くなり、私も微力ながらお手伝いに参加するようになりました。紆余曲折を経て、充さんの卒業と同時に「コミュニケーションルームこどものへや」は誕生しました。

開所式で瀧川郁子さん(所長)は、学校卒業後に在宅生活に戻るのでなく、家とは別の場所で仲間と一緒に日中活動ができるようになったことを喜ぶとともに、「障害の重い人の姿を見てほしい」ということを強調されていました。特に、「言葉は話さないが、言いたいことはある人」として見てほしいという趣旨の話をされていました。「コミュニケーションルーム」という言葉には、この「思い」が込められているのだと改めて

確認できました。

二十八年前の動画を見て、瀧川郁子さんの「思い」がみなと舎の活動全体に一層浸透していくように、微力を尽くしたいと改めて思いました。



ゆう開所式で挨拶をしました。



松田 直

元国立特殊教育総合研究所職員
現みなと舎評議員

◆ 「前へ」を実践した方

平成五年に作業所「こどものへや」が市内長沢に開所した時、近所の方から誘われ参加しました。作業所なのに作業は何もしない、養護学校を卒業してもう大人なのに、「こどものへや」という名前。疑問はありましたが、瀧川さんから「社会に出るのが仕事です。」と言われ、ここはメンバーさんの生き方を模索する場所なんだなと思ったのを覚えています。それから二十八年近く、「みなと舎」に係わらせていただいていることは感謝です。

作業所の毎月の職員会議では、瀧川さんはスタッフの意見をよく聞いて下さいました。皆もこの課題は、どうしたらいいんだろうと、自分の考えを言い、ともすれば議論は白熱し、会議後の帰り道でもよく話していたのを覚えています。それは、

瀧川さんが、上からの指示ではなく、皆が意見を出し合い、納得の上で作っていくというやり方で進めてくださったからだと思えました。それで、「ゆう」のスタッフになっても同じ様にしてしまい、各部屋でのミーティングの時、何の資格も持たないただのおばさんが、いろいろな意見を言うのを面倒臭く思う若い人もいたような気がします。作業所時代は市内の関係行事だけでなく、様々な場所にメンバーさんと一緒に積極的に行かせていただき、今までメンバーさんが出来なかったことを全部試してみるとい感じでした。

特総研にも二ヶ月に一回行きました。メンバーさんの日常生活の向上と共に、私たちスタッフの資質向上も考えて下さっていた気がします。スタッフは市内外で行われる研修会

への参加、他の福祉事業所の見学もさせていただき、小さくても充実した職場でした。

強い気持ちで充さんのために始められたことが、今では皆のためになっています。次はどうすればと、既存のルールを利用しながらも新しいことに挑戦して、メンバーさんたちのこれからの生活を考え、いつも「前へ」という気持ちを忘れないで実践してこられた方などと、改めて思いました。



中田 光子
ヘルパーゆう
管理者



◆ 瀧川郁子様

突然の訃報に、お見舞いすらできなかった事、残念としか言いようがありません。いつか、なつかしい人達が集まって、思い出話に花を咲かせ、明るい笑い声が響く日が来るものと思っていましたから。

瀧川さんには、感謝の気持ちでいっぱいです。こどものへや、ゆう、はなえみと携わらせていただいた事、私の人生において、大きな宝物となっています。

こどものへやの開所式で『指導員さん達です』と紹介され、自分が場違いな所にいるのではと、不安になったのを覚えています。それから、手さぐりで一生懸命でした。私達を信用して、まかせて下さった事で、充さん達との友達でもない親でもない、まして指導員でもない、人と人との大事な関係を築く事ができ

ました。これは施設ゆうになってからも私の土台となりました。何の資格も経験もない私にとって、信頼しただけにいると思える事が、大きな力になっていったと思います。

瀧川さんは、私達の話をいつもしっかりと聞いて下さいましたね。ありがとうございました。これからも、私の心に尊敬と親しみを持って生き続ける事と思います。

マッシュルームカットのかわいらしい男の子(充さん)の車椅子を、ほほえみを浮かべゆったり押す、上品でおしゃれな姿(初めてお会いした時)が心に焼きついています。

そちらで一足先に、福谷さん達と同窓会を始めていて下さい。「あら、ヤダー」と福谷さんの声が聞こえてくるようです。
感謝をこめて。



ちょっと足を伸ばして、東京ディズニーランドへ。



相川 英里子
元こどものへや
元みなと舎スタッフ

◆ 輝いた日

私が瀧川さんにご縁ができたのは、「こどものへや」が四年目に入った頃でした。

一般家で重度障害者の介護をするのは、スタッフに負担がかかりすぎる。施設を作ろう。と動き始めていました。

月一回の職員会議で、土地探し、資金繰り、行政とのやり取りと計画の進捗状況を聞かせていただきました。

それから二年余り後の八月、みなと舎「ゆう」が開所するわけですが、その三ヶ月くらい前から、職員会議で見る瀧川さんのお顔は、眉のラインが段々つり上がり、日々大変な思いをされているのだなと感じていました。「ゆう」が順調にスタートし、メンバーにもスタッフにも笑顔があふれる頃、気付くと瀧川さんの眉は、

穏やかなラインを描いていました。

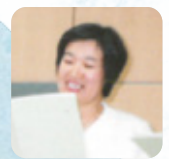
その五年後、グループホーム「はなえみ」開所の日、瀧川さんはこんな挨拶をされました。「私は、この子といつか輝く日がある。充と輝く日がきつとある。と思ってこれまで過ごしてまいりました。今日がその日です。」と。

しっかりと持った理念を持った女性に身近に出会えたことは、私の人生にとって大きな宝物です。

瀧川さん、大きな大きな種を蒔かれましたね。「みなと舎」はどこまでも伸びてゆきます。瀧川郁子さんに感謝!



いろいろなところへお出掛けしましたね。



高橋 賀子
元こどものへや
元みなと舎スタッフ



◆ 瀧川郁子さんを偲んで



子供達に「ゆう」という優しさに溢れた居場所と、その家族にも自らを労わる時間を与えてくださった貴方に、ゆう家族の会として、心からの敬意と感謝の念を捧げます。

と同時に、貴方の理念に賛同され共にご尽力いただいた方々に、この誌面をお借りして御礼申し上げます。

養護学校卒業後の子供達の将来を案じ、同じ志を持ったお母様方が「こどものへや」と名付けた小さな一室で、こつこつ製品を作り販売するところから、ゆう開所まで繋げてくださったことに、本当に頭が下がります。経緯の詳細全てを把握できていた訳ではありませんが、開所に至る迄のご苦労は様々耳にしております。

が、私を知る瀧川さんは、それらをあまり口にする方ではありませんでした。いつも凛とされ強い信念を抱きながらも、柔らかい物腰と穏やかなお人柄で、周りを温かく包んでくださる憧れの女性でした。

私が家族会の会長に就いた年「ライフゆう」が開所され、「ゆう」のメンバーさんも多数入所されました。当然ながら会の会員も減り、それまで同様の活動が難しくなってきたことから、私は瀧川さんに、いろいろご相談させていただきました。

瀧川さんは、ひとつひとつ丁寧にご対応くださり、答えを出せずにいる私に「大丈夫よ、自信を持って！」と勇気付け後押ししてくださいました。至らぬ私がかを長を幾年も続けてこられたのは、瀧川さんのおかげだと思っております。

瀧川さん、貴方の功績からは「ゆう」のみならず、「みなと舎」の全てのサービズを利用されている障害者とその家族が恩恵を受け続けています。これまでどれだけの利用者として家族が救われてきたことか・・・それは貴方の理念の賜物です。

「みなと舎」が、今後も利用者に寄り添ったサービズを多くの方々に届けられるよう、私達も微力ながら協力させていただく所存です。

どうか見守っていただきたいですね。ありがとうございます。



松尾 貴子
ゆう家族の会
会長

◆ 思い起こせば・・・

「瀧川さん」のお名前を知ったのは、晋一が国立久里浜養護学校の幼稚部に入學してからでした。当時、次男出産のため、晋一は寄宿舎に入り、私はほとんど学校へは行けず、晋一と充さんとは五学年の差があった上、教室も違ったため、お会いする機会もなく、PTA会長だった瀧川さんは、まさに「雲の上の人」でした。

時は流れ、高等部を卒業する段になり、さて、この先どうしたら・・・と思案に暮れていたところ、瀧川さんより、所長をされていた作業所「こどものへや」に誘って頂きました。五ヶ月後の夏、ゆう設立の開所式にお声掛け頂き、光栄にも参列致しました。

瀧川さんの蒔いた種は、この四半世紀で大きく育ち、種々のサービズ

の充実、二つのケアホーム、悲願だった入所施設のライフゆうも出来ました。かつてのご苦労を見聞きしてきた身には、ただただ感謝しかありません。

ケアホームはなあかりの住人となつて十三年目に入った息子も、他のメンバーさん共々すっかりその生活リズムに馴染んでいるようです。

気分的にもゆとりが出た母達は、瀧川さんを含め、皆で時折、旅行など楽しんでいました。私が唯一参加出来たのは、なばなの里のイルミネーションの一泊バス旅行でした。これを機に、腰痛悩みの体調も、出掛ける気力も上向き始めました。私も絵が好きなきともあり、一緒に上野の森を手始めに、あちこちの美術館や展覧会に出掛け、鑑賞後のお茶もまた楽しかったです。さらには演

奏会やイベントにも足を運び・・・。

「遊び」に付き合ってくださいただでなく、いつも前向きで、確固たる信念、的確な意見、素早い行動力、そんな先輩の背中を見ながら後を追ってきた気がします。

コロナ禍が終息し、あれこれ報告が出来る世の中が来ることを願って・・・。(合掌)



矢田 美恵子
ケアホーム
メンバーさんご家族

◆ 瀧川さんの思い出

まずは私の尊敬する瀧川さんのご冥福を心よりお祈りいたします。

瀧川さんとの出会いは、久里浜養護学校「現筑波大学特別支援学校」の幼稚部に娘が入学した時でした。娘はまだ四歳で初めての集団生活、右も左もわからない私に瀧川さんは「国も市もこの子たちが学校を卒業した後の行き場など何もしてくれない。親が行動しなければ、ずっと自宅で過ごすことになる。」と話して下さいました。

それから有志が集まり、バザーの品々を作り、生協まつり、幼稚園のバザーなどたくさんのお店をし、資金を作る事ができました。その活動の中で一番印象深かったのは、ハイランドの自治会のご厚意で年に二回、町内会館をお借りして、地域の



方々との交流が出来たことでした。娘は高等部を卒業して、数カ月「こどものへや」に通所しました。そのころ「ゆう」開所に向けて瀧川さんを中心としたメンバーが尽力下さいました。皆さんは多くの苦難に遭遇し、悔し涙も流されたとお聞きしました。「ゆう」がオープンした時はとても感慨深いものがあつたと思います。

その後、ケアホーム二か所、そして、入所施設「ライフゆう」オープンまでずっと瀧川さんは走って来られました。入所施設を作るにあたり私は「お子さんの充さんは入所しないのになぜこれほどの苦勞をしながら作ろうと思つたんですか？」と訊ねました。その時「朝菜さん（娘）のように医療的ケアの人が入所する所が無いでしょう？だからよ。」と

きっぱりおっしゃいました。自分の子供、ただではなく、障害をもつ全ての子供の幸せを祈っていた方だったと思います。

娘は今、「ライフゆう」でコロナの中、安心して過ごしています。瀧川さんは私たちの家族の恩人です。娘がまだ小さい時に親は何をすべきか、教えて導いて下さいました。瀧川さんとの出会いがあつたからこそ今の私があります。本当に素晴らしい出会いでした。ありがとうございます。ゆっくりお休みください。



飯干 美智代
ライフゆう家族の会
会長

◆ 瀧川郁子さんを偲んで

瀧川さんといえば、障害者地域作業所「こどものへや」の事が思い出される。その当時私は肢体不自由者の作業所（五か所）のまとめ役をしていたので、所長である瀧川さんの人柄に強く興味を持ったのは言うまでもない。もう一つ興味を持ったのは作業所の名称である。私は元々障害者の自立を実現すべく「たけのこ」という作業所を設立したので、なか瀧川さんが障害者を子供扱いしているという懸念を抱きながらお付き合いを始めたことは偽らざるところである。

危なく批判をしそうになったのだが、名称の狙いは、親にとって子供である障害者がいかに自主性をもって自分らしく生きられるかを実践するところであるということ伺い、逆に感動を覚えたのをつい昨日のよ

うに覚えている。

子供である障害者が自立する時親も又なお一層自立しなければならぬ。それを瀧川さんはみなと舎という社会福祉法人を作る事から始め「通所施設ゆう」の設立という形で実践したのである。正しく見事な障害者の親の自立である。そこに神様はこの業界のスーパーマンであり現理事長の飯野さんを与えてくれたというわけで、神様はやはり重症心身障害者のことを心から愛しておられるのであろう。感謝、感謝である。

加えて「入所施設ライフゆう」が誕生した時私は喜びいさんで、僅かな寄付を携えて瀧川さんと飯野さんのもとに駆けつけ、長年あためていた重心の人達に対する思いをお二人に打ち明けたのである。

私は障害者の自立を目指し福祉事

業を始めたので今は比較的障害の軽い人達を対象としているが、私の事業展開の到達点は重心の人達に対する支援である。のちに他の人から聞いたのだが、その時の私の思いを瀧川さんがご理解いただき大変称賛していただいたそうである。私にとっては光栄の至り以外の何ものでもない。

瀧川さん、いつまでも重心の人達を見守ってください。宜しくお願ひします。



川島 美行
NPO 法人たけのこ会
理事長

◆ 瀧川さんを偲んで

瀧川郁子さんの訃報を聞き、時の過ぎる速さを強く感じました。安らかに眠り頂きたいと思えます。

瀧川さんは会員として・役員として精力的に活動されました。

昭和三十三年（一九五八年）十月に創立された父母の会は、療育・教育の場をつくることを課題に運動を進めました。間もなく「手足の自由な子どもを育てる運動」が全国的に始まりました。絵ハガキの頒布による啓発と活動資金確保をするもので、運動を支えてきました。

療育・教育の場は四十年代に整いました。はぐくみかんに療育センターが、岩戸養護学校に小・中、武山養護学校に高等部。共に五十年の歴史を刻みます。

昭和五十年代になると障害者の権

利や地域での生活を支援する制度が整えられる時代になり、日中活動の場の作業所等が開所されて来ました。

父母の会は地域生活の拠点となる入所施設建設や障害者の生活を支援する制度の制定への運動を進めて来ました。

瀧川さんはこの時代に、学校を卒業した後の地域生活の事を念頭に先進事例等を見てこられました。特に重度の障害者の生活基盤の整備に意を注ぎ、通所更生施設「ゆう」を立ち上げられました。

その一年後の平成十一年に「スウェーデンの福祉事情視察」に参加され、見たり聞いたり、見聞で得た事。ペンクト・ニイレエの「ノーマライゼーションの原理」の講演で知り得た事。この事で、それまで考え

てこられたことを確信に変えられ、その後の活動の糧として問題解決に当たられて来ました。

瀧川さんの思いは、これからも多くの方に引き継がれて行くものと思えます。

高い所から、その様子を見ていて欲しく思います。



大武 勲

横須賀市肢体不自由児者父母の会 会長

◆ 瀧川さんを偲んで

瀧川さんは施設作りの際に横浜にある訪問の家「朋」を大きな目標にしていました。メンバーを中心に一人ひとりの思いを大切に、家族と職員が信頼できる施設にする。訪問の家の顧問である日浦さんが朋とゆうは同じ目標を持った根っこから生まれた木と言っていました。

瀧川さんは仲間と共に「こどものへや」という小さな木を植えました。その木に社会福祉法人みなと舎という接ぎ木をしました。木を育てるには植木屋さん（飯野さん）、と沢山の肥料（資金）が必要でした。

瀧川さんは先頭になり肥料を集め大きな木（ゆう）を育てました。その木も普通の木ではなく沢山の新しい形（医療的ケア、補助金制度、ケアホーム立ち上げ等）の幹をつけるため植木職人さんの陰になり日向に

なり理事長としての大役を果たして来ました。

理事長退任後も後援会長等みなと舎の顔として活躍されました。その一つが当初から目標にしていた入所施設です。ゆうの根の一部を切り取り、親たちの念願であったライフゆうという新たな木を植えました。これは瀧川さんが木を育てる名人である飯野さんを口説き落とし、沢山の肥料を集めてくれたおかげです。

木にはメンバーという枝があり、枝にはスタッフという葉が沢山つ



2020年2月の研修会より。

ています。また大きな木の下で親子が休むことが出来るようになりました。

木の苗を植え、肥料を与え、植木職人さんと相談し立派な木に育ててくれた瀧川さんには感謝しかありません。

その瀧川さんが楽しみにしていた行事があります。スタッフの研修を兼ねた発表会です。各グループの職場紹介をした発表、川柳等、機会があればメンバーのお父さん、お母さんにも見てもらいたいし今後も続けて欲しいねと話していました。

亡くなる三か月前に電話で話をした時も、最後まで子供たちと施設の心配をしている瀧川さんでした。心からご冥福をお祈りいたします。



長谷川 良一

ケアホーム
メンバーさんご家族
みなと舎評議員

◆ 瀧川郁子さんを偲んで

迂闊にも前回の評議員会の時、瀧川さんが評議員を退任されると聞いた時に、「なぜ」と思ったのに最後に理由をお聞きせずに帰ってしまいました。今日、飯野理事長より瀧川さんの訃報を聞き大変な驚きと悲しみに見舞われました。

瀧川さんと初めてお会いしたのは、「みなと舎」の前身の「こどものへや」を立ち上げたばかりの頃でした。社会福祉法人を設立し、現在の「ゆう」を開所するという目的で、瀧川さんを含むメンバーの方々が設立準備委員会を作り、私も一緒に土地探しのお手伝いをさせて頂くことになりました。何度も湘南鷹取のご自宅で打合せの会合を開催し、色々な場所をご案内して、一緒に一つの目的に向かって進んでいきましたが、何度も色々な壁に当た

りました。その度に、設立準備委員会皆さんの熱意とあきらめない心で一歩ずつ前進していきました。

事業計画が一年間先送りになった時、荻名の町内会長の所に何度も足を運び、施設の建設に対してのご理解と協力を頂くために施設の必要性などについて説明した事、地元住民説明会を行った事等々、今も色々なことが思い出されます。

瀧川さん達にとっても、プレッシャーを感じた事や、不安になったことも何度もあったと思います。そんな中でも、瀧川さんはいつものこやかに落ち着いて対応されていたのが、とても印象深く思い出されます。瀧川さんが初代理事長に就任されて歩んできた「みなと舎」は、とても素晴らしい発展を遂げました。

これからも「メンバーさん」と一緒に、更なる発展していくことを、確信しています。

瀧川さんと一緒に歩ませていただいた事は、私にとって大変貴重な財産となりました。とても感謝しております。

最後に瀧川郁子さんのご冥福をお祈り申し上げます。大変お疲れさまでした。ありがとうございます。



野坂 義彦
みなと舎
評議員

◆ 瀧川郁子さんを偲んで

瀧川さんと初めてお会いしたのは高校時代で二年、三年と同じクラスの時でした。六十年前のことで、はつきり覚えてはいないのですが、当時は今では考えられないほど男女間であまり会話、交流がなかった時代だったような気がします。（そうではない人もいたとは思いますが）

そんなことで高校生活の思い出はあらためて文章にするようなことはあまり残っていませんが、私にはそれなりに友人たちと過ごした楽しい青春時代で、クラブ活動が大半の野球づけの三年間でした。

卒業後クラスメイトとは学生時代になつてからお互いに連絡しあって、大学の音楽会やハイキン



グ、ドライブなどに出席したような気がします。写真はその時のワンショットです。さて、その後久しぶりに再会したのは、お互いに福祉の道に進んでからでした。瀧川さんは息子さんの将来のことをお考えになり、私は老人福祉のための施設造りに奔走していました。私どもの法人が立ち上がって一年後の平成九年三月から亡くなるまでの二十四年間、理事を務めていただきました。会議中に瀧川さんの顔があるとなんとなく安心した気持ちになりました。病状は以前お聞きしていましたが、昨年八月にメールをいただき、化学療法はあと一度ですが、体力の消耗が甚だしいし、手の痺れがあり字を書くのが辛い、とおっしゃっていました。その後今年の二月には、転移が三か所見つかり、今日から入院し



いてください、とお話をいただきました。瀧川さんには本当に長い間支えていただきありがとうございます。心強かったです。

二年前の六月に高校時代の同窓会の幹事を一緒にしました。参加者は十五名だったのですが、いい時期に集まれたなと思います。

周りの人たちを温かく包む笑顔、その場にいるだけで和み、温かくほっとした雰囲気させてくださった瀧川さん、安らかにゆっくりお休みください。



栗田 敏彦

社会福祉法人栗山会
理事長

◆ 瀧川さんとの出会いに感謝して ～3つのエピソードから～

瀧川さんと初めてお会いしたのは、ゆうがオープンして間もなくでした。ショートヘアに素敵なスーツ、凛としたお姿にオーラを感じました。私は気軽に見学のつもりで伺ったのですが、役員のお母様方に沢山質問をされ、最後に瀧川さんから「山本さんの色で、好きなようにやって下さって構わないのよ」と思いがけないお言葉をいただきました。しかし、私は「ゆうのカラーはメンバーさんが創り出すもので、私が出来るのはちょっとしたお手伝いぐらいで・・・」と失礼なお返事をしてしまいました。帰りの電車の中で「今日のはもしかして面接試験？」『大変な苦勞をして創った「ゆう」を、初対面の私に自由にどうぞ？・・・』考えるだけでドキドキし、衝撃的な出会いだった事を思い出します。

瀧川さんは学ぶことにもとても意欲的な方でした。滋賀県で行われた「アメニティーフォーラム」の研修にご一緒した事がありました。二泊三日、朝早くから夜遅くまでハードなスケジュールだったのですが、一語一句逃さないように真剣にノートを取り、他の参加者の方と積極的に意見交換もされていました。「根を詰めて疲れませんか」とお聞きすると「作業所の所長のおばさんから、まがりなりにも社会福祉法人の理事長になったのよ。知りません、わかりませんじゃ恥ずかしいでしょ。オホホホ」と笑顔で返答。パワフルでユーモアに富んだ瀧川さんがキラキラ輝いて見えました。

やストールなどをいつも買って来て下さいました。私への労いと「お洒落を楽しんでね」と言うメッセージが込められていました。又、ご自身は勿論のこと、スタッフの身だしなみや言葉遣い、メンバーさんへの接し方についても常に心を寄せ『みなと舎の誇りと品格』を大切にされていました。



山本 修子
ゆう
施設長

◆ 私の知らない時間の中から、瀧川さんの「ことば」にふれる

私が入職する二〇〇八年までの機関紙（「じぶものへや」・「たまごむし」）から瀧川さんの「ことば」を拾いました。

【所員からの贈り物】1994.3.22 No.11)「(中略) 若者が最も大切にするのは、仲間であり、友情です。この一年で所員たちの心は若者としての成長を遂げていたのです。(中略) 本当に大切なものは何かを、逆に教えてもらいました。(中略)」

【所員それぞれの成長を祝って!! 二十歳の感慨】(1995.1.24 No.20)「(中略) 親のためらいや理屈で子どもたちの世界を狭くしないように、親が社会と子どもとの間の壁にならないように気をつけなくてはならない。(中略)」

【所員のこころの成長を見守って】(1995.1.24 No.20)「(中略)『できなご』『きらご』と思っていたことは、単に『慣れていない』だけでした。(中略)」

【広がる車いすでの行動】(1996.3.29 No.34)「(中略) 少しずつ街が変わり、駅が変わり支えてくださる方がいて、障害者の生活も広がってきている、そんなことを実感した春の午後でした。」

【反映させてほしい皆の意見】(1996.12.27 No.42)「(中略) 私たちの子どもの学校時代を考えると、どこからが教育で、福祉で、医療でと分けては考えられないことばかりでした。市はそこで暮らしている障害者にとって、一番身近な行政機関です。(中略) この福祉計画がいわゆる縦割り行政ではなく、体系的・

総合的な基本計画となることが望めます。」

【健康第一】(1997.3.31 No.45)「(中略)『健康第一』です。では第二は？それは『喜怒哀楽』を大切に、です。(中略) 表情のあることは当たり前ですが、ボンヤリと無表情でいる時期を知っている親にとっては、生きているという実感を彼らが持っているという、かけがえのない証明になっています。(中略)」

瀧川さんは、常にメンバーさんの姿を通した「風景が大切」と言っているようです。



森下 浩明
みなと舎
総合施設長



◆「前人栽樹、後人乘涼」

瀧川さんとの出会いは「こどものへや」が出来て二年目頃でした。横浜の「朋」をはじめ幾つかの法人・施設創設に関わってきた私の噂を聞いた瀧川さんが我が家に来られ、「施設を是非創りたい、つきましては講演をお願いしたい」とのことでした。そして講演のテーマは「横須賀で重心の通所施設をつくるには？」でした。

講演では、法人格を持った施設創りには三種の神器「ひと」「土地」「おかね」が重要であることを伝えました。

その後開催された肢体不自由児者運動会の開催された日、「お金だといくら位準備したら良いでしょうか？」と数名の方に囲まれて質問されました。私は「土地の広さ、公道に面した場所、ライフライン状況の

」先人は樹木を植え、後の人は涼をとる」関係等で五千万円は必要でしょう」とだけ答えておきました。

ところが運動会後一か月も経たないある日のこと、瀧川さんから相談があるとの事でお会いすると「50,000,000」とだけ記載された真新しい通帳を提示されたので本当に驚きました。

更に瀧川さんのお話で驚いたことは、「手芸品づくり、バザー、家賃のご寄付、所長の給与等々これまで溜めてきたものだけでは全く届かない。それならば、自分たちの子供が大学に入る入学金と違って、一口百万円、それぞれ家庭状況に合わせて出し合いましょう」と皆さんで話し合っただけの事で、最終的には十名程度の方が協力して下さったとの事でした。

もちろん目標金額合わせ等のご苦

勞は瀧川さんがされた事と思いません。

瀧川さんたちの熱意に動かされた私は、仲間として法人創り・施設造りに参画することになりました。

資金の準備ができましたので、次は建設用地探しです。瀧川さん始めメンバーさんやお母さん方も一緒にしました。登記簿謄本と地図やメジャー片手に設計士と市内十四カ所程廻つ



2008年4月に理事長交代式を行い、瀧川理事長から飯野現理事長に交代。瀧川さんは、酒井信明前会長から引き継いで後援会会長に就任されました。



2009年4月に設立した、みなと舎の2つ目となるケアホーム「はなあかり」の地鎮祭の様子。

て、最終的に決まるまで一年がかりでした。

「ゆう」は重い障害のある方たちの「人生大学」だったのです。

重い障害のあるメンバーさんたちの通える「こどものへや」から始まって二十八年、法内施設「ゆう」と共に歩んだ理事長瀧川郁子さんのご活躍は、多くのメンバーさんやご家族にとって先人そのものでした。



飯野 雄彦
みなと舎
理事長



ゆう開所式にて。



法人設立20周年を記念して、メンバーさんご家族と対談を行いました。





こどものへや No.1 (1993年5月8日発行)

手を取り合って

所長 瀧川郁子

明るい日差しの中、車椅子を並べて散歩に出かけることもたちと指導員さんの姿を見送り、「本当に始めることができました」との感慨が湧いてきます。温かく受け入れて下さった長沢の地域の方々に感謝の思いでいっぱいになります。

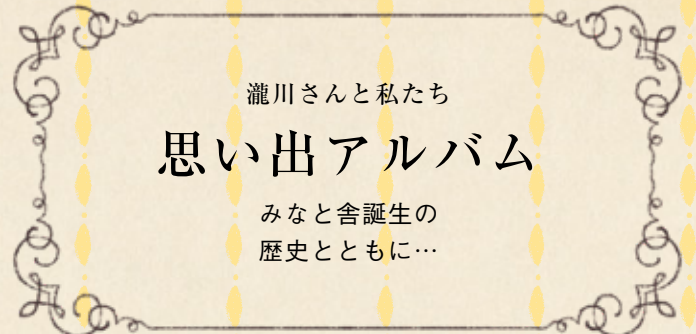
始めるまでに挫折しそうな苦しい思いもりましたが、今は支えて下さる大勢の方々のいられることに励まされています。ひとりの力は弱いものですが、手

を取り合っていく時、一つのことのできあがるのだとの思いを強くしています。指導員さんやボランティアさんや先生方など、直接子どもたちにかかわって下さる方々はもとより、寄付を下さる方、昼間の空いている時に駐車場を貸して下さいる方、看板を作って下さった方その他大勢の人々の温かさのなかに「こどものへや」は存在しているのです。

その反面、重度の障害を持つ若者は、まだまだ知られていないのだとの思いもしています。生きることのすばらしさを語りかけている若者たちの存在を知っていただくことも「こどものへや」の仕事の一つだと思っています。街へ出かけて「人々とふれ合うこと」、こんな簡単なことから理解の一步は始まると信じています。

「頑張つてね」と声をかけられたのよ」と散歩から帰った指導員さんが嬉しそうに話しています。

自然に恵まれたこの地で、若



1993年から1998年までに発行された新聞「こどものへや」の第1号から59号までを法人のWEBサイトで公開しています。ゆう設立までの当時の想いや葛藤をじっくりとお読みいただけます。

こどものへや



「こどものへや」は1993年4月、横須賀市長沢の一軒家でスタート。初期メンバーは6名。テーマは「ダメモト精神で、気軽にチャレンジ!」。ご近所のお散歩から始まり、市内作業所との交流、電車に乗って出かけたり、沢山の経験をしました。



1993年11月、横須賀市主催のみかん狩りへ「こどものへや」のメンバーで参加しました。当日は日頃の行いが良いと見え、暖かい好天に恵まれました。足元を気にしながら車椅子でみかん畑の中へ入り、みかんに直接手を伸ばして採ったり、すぐに食べたり…短い時間でしたが、帰りにはお土産のみかんを頂いて、秋を充分満喫した思い出に残る良い一日になりました。



穏やかな時間をみんなで過ごしました。



ゆう

「カラオケ・ボーリング・お花見・大阪食い倒れツアー」など、施設から飛び出して沢山楽しみました。又、地域の方達と触れ合ってきた「オープンデー」では、家族の会のお手伝いと笑顔が成功の秘訣です。



はなえみ・はなあかり

ゆう設立から5年後にケアホームはなえみが、そのまた5年後にはなあかりが設立されました。仲間との暮らしはかけがえない日々となっています。



ライフゆう

ライフゆうから瀧川さんへ初代理事長瀧川さんのゆう設立への行動力に大きな力を貰いました。ゆうからつながれた「街に出よう、知って貰い普通に楽しもう」の思いはライフでの目標ともなりました。瀧川さんチャレンジ続きますよ、見守って下さいね。



これまでの功績を讃え、記念品の贈呈を20周年記念式典にて執り行いました。



1998年8月3日、「ゆう」の開所式がメンバーさん、ご家族も含めて170名近い人の参加で行われました。「ゆう」の活動は、やさしく楽しくさわやかに、ひとり一人にあったプログラムを大切に。最初のメンバーは「そら」の部屋は7名、「ひかり」の部屋は7名で活動を始めました。

こどものへや No.59 (1998年7月24日発行)

『こどものへや』から『ゆう』へ

所長 瀧川郁子

障害が重くとも一人の人間として尊重され、人生を大切に生きて欲しい。訓練や学習から解放され、人生を楽しんで欲しい。生まれてきて良かったと感じて欲しい。そんな思いで『こどものへや』を始めました。
五年前は、その名のように、子どもの面影が残っていた皆の顔も、今では大人の面構えとなりました。二十歳という法的にも成人として扱われる節目の時にここで越しました。人生の大切な時を共に過ごした幸せと責任を感じています。
障害者地域作業所という制限の中で、障害の重い方達に何ができるのか、何ができないのか、悩んだこともありました。しかし少人数なことで小回りのきくこと等、小さいことのメリットを捜すことにしました。天候や体調により、その日に日課を変更することが可能でしたし、外出も一人ずつ、その人の体力と好みに合わせたスケジュールを組むことができました。
また、所員にとって『こども

のへや』での何よりの宝物は、多くの方々を知り合えた事だと思えます。指導員・ボランティア・訓練や特総研の先生等、大部分の方が五年間変わらずに、定期的に関わって下さいました。多くの方々には接する事は不安をもたらすのですが、継続してお目にかかる事により、その方を知り安心感を持つようになります。人間関係の狭くなりがちな所員には嬉しい出会いでした。最後に皆に聞いてみたい。『こどものへや』での時を楽しんでくれたでしょうか。充実感を味わった時が持てたのでしょうか。



ゆう地鎮祭でご挨拶を。